

北宋山水画史における《十詠図巻》の意義について

同志社大学
倪晋秀

北京故宮博物院所蔵の《十詠図巻》には、十首の詩と孫覚（1028-90）の序文が書き入れられ、巻尾に陳振孫（1179-1262）など4人の跋文が付されている。驚くべきことに、この序文と跋文によると、本作は北宋の詩人張先（990-1078）が1064年、故郷である江南の呉興で父親が生前に詠んだ十首の詩に基づいて制作したことが分かり、極めて稀な北宋江南山水画であるということになる。

主な先行研究として、徐邦達は、本作の序跋類が周密（1232-98）著『齊東野語』の記録や、周密の友人である趙孟頫（1254-1322）による題画詩の内容と一致し、「画風に俗気がない」ことを根拠に、本作を原本（張先の真筆）であると断定した。また洪再新は、本作を「張先の意識を反映する」北宋の基準作とした上で、「趙孟頫などの大家に直接影響を与えた」早期文人画であり、士大夫が自らの財産を描く「家産山水画」の嚆矢だと主張した。それに対して呉敢は、序跋類が『齊東野語』の記録と相違し、「宋画の質朴が乏しく、巧みで軽く見える」ことを根拠に、明代の模本だと指摘した。

本発表の目的は、このような先行研究が指摘した制作年を検証することによって、《十詠図巻》が北宋山水画史においてどのような意義を持つのかを明らかにすることである。

そのため、第一に本作の概要を確認した上で、第二に画中に記されている序跋類を『齊東野語』の記録と対照すると、ほぼ一致するが、序文では11箇所、詩文では24箇所の相違があることを指摘する。第三に画中のモチーフを特定した上で、趙孟頫の題画詩の内容と照合し、画中に描かれた雅集の場面や溪流などのモチーフが、題画詩の内容と一致することを指摘する。第四に北宋山水画と比較し、本作は建物が傾いていたり、樹木が草々としている点で、士夫画の特徴を示していることを指摘する。しかしながら、これらテキストの異同、題画詩の内容との一致、士夫画の特徴、いずれも制作年を決定する根拠とはならない事も確認する。第五に本作は、江南呉興の水辺の風物を描く絵画でありながら、様式的には、湿潤な筆墨法などの点で董源を代表とする江南系山水画スタイルとはかなり異質であり、山・岩の輪郭線を濃く太く描く点で華北系山水画と共通し、北宋末の模本である可能性も想定できることを指摘する。

以上の検討から、もし本作が原本または北宋末の模本とするならば、北宋後期の江南に、自然山水ではなく、士夫個人の日常生活を表現する山水画——明清の園林山水画と繋がる——が存在したことになり、北宋山水画史を書き直すきっかけとなる意義が認められる。また、たとえ明代の模本であったとしても、文献に忠実である点で原本の姿を彷彿とさせ、北宋山水画史に新しい局面をもたらすことを指摘する。いずれにせよ《十詠図巻》は、北宋山水画史研究において重要な意義をもつ作品であることを明らかにする。